第３　問題作成部会の見解

１　問題作成の方針

平成23年度の問題作成に当たっては、大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）の目的と性格及びその役割を考慮し、従来の方針を継承しながら、現行の高等学校学習指導要領の理念にそって、可能な限り新味を加えつつ受験者の学力を検出できるように配慮した。また、論理的思考力と感受性をバランス良く兼備した学力の重要性を考慮し、その達成度を判定できるものとすることを目指した。

以下は、問題作成部会として特に留意した点である。

⑴　問題は昨年と同様に４問とし、「近代以降の文章」から評論と小説各１問、「古文」１問、「漢文」１問の配列とし、200点（各50点）の配点、80分の問題とした。

⑵　出題の範囲は、高等学校教育における新教育課程の実施を踏まえて、「国語総合」「国語表現Ⅰ」の教科書レベルとし、受験者の基礎的かつ基本的な学力が反映されるように配慮した。また、受験者の思考過程にそった設問及び設問形式となるように工夫し、各設問の難易度がバランスのとれた問題となるように考慮した。第１問は現代の評論を、第２問は現代の小説を、それぞれ素材に選んだ。

⑶　問題の構成は、高等学校の国語教科教育の実態に即して、基礎的かつ基本的な学力が検出できるものとなるように配慮した。また、受験者の文章読解や思考過程の流れにそう問題構成となるように工夫し、難易度においてバランスのとれた設問構成となるように考慮した。

⑷　問題文、設問、リード文及び各選択肢の吟味には細心の注意を払うとともに、基礎的言語能力・認識力・想像力・判断力を含む総合的な国語能力を問うものとなるように工夫し、論理的な思考力と感性的な鑑賞力及び国語表現能力も判断できるように配慮して問題作成に当たった。平成23年度の受験者は、昨年より7,783人増えて、505,214人、平均点は3.67点上がって、111.29（55.64％）であった。センター試験は各科目の平均点６割を目安としていることから、適切な難易度の範囲内にあることを示す数字と言えよう。

２　各問題の出題意図と解答結果

問題ごとに、問題文の選定と出題意図や工夫を述べ、併せて受験者の解答結果を踏まえた試験問題に関する考察を述べる。

第１問　鷲田清一（きよかず）「身ぶりの消失」（平成17年８月「昭和住宅メモリー」所収）から出題。掲出箇所は全文から冒頭と結末部分を取り除いた３分の２を出題した。日常生活を通じて身体自体に累積されてきた様々な身ぶりとその消失を論じた評論。木造家屋を再利用した「グループホーム」を例にとり、現代の「住宅」における「空間の編みなおし」について論じている。私たちが経験的に獲得してきた身ぶりを消去してしまう現代の「バリアフリー」空間の問題点を指摘しながら、古来の知恵の差し込まれたかつての住居空間の可能性に言及している。

生活空間における日常的な身ぶりの問題から、今後の社会における生活空間のあり方につい

て論じていく展開は、平易なものではありながら、センター試験の受験者たちには、ある新鮮さをもって受け止められることが期待され、素材文としての適切さを備えたものと考える。文意を理解する力、構成を把握する力などを問う上でも適切な問題文であると考えた。本文は、約4,200字。

問１　基本的な漢字知識とともに、傍線部前後の文脈への理解力を問う問題。(イ)・(エ)・(オ)の正答率が高めであった。(ア)の正答率は約２割、(ウ)約５割であった。日常的に用いる言葉だけではなく、文章語に用いられる漢字語いが豊かである受験者が優位に立ったと思われるが、これらにより受験者の偏差を明確に区分することができた。

問２　本文序盤にある「からだが家のなかにある」という、傍点付きの表現内容を読み取らせる問題。受験者を問題文の論旨展開に適切に導入させるための設問。正答率は約７割と高めだが、出題意図に照らしても適切な結果であった。

問３　本文中盤にある「空間が……先回りしてしまってはいけない」という主張の根拠を読み取らせる問題。「なぜか」と理由を問う問題を中盤に設けることで、本文全体の展開について考えさせようとした。正確な内容理解が求められる。正答率は約５割。最も多い誤答は③の約４割。識別力を測ることができた問題であった。

問４　本文後半にある「この空間には『文化』がある」という、カギ括弧付きの表現内容を読み取らせる問題。正答率は、約９割と非常に高かった。

問５　本文終盤にある「空間の密度を下げている」という表現の内容を読み取らせる問題。前段落までで具体的に論じられてきた「行為と行為をつなぐ」こととはどのようなことか、その関係性も含めて問うことで、本文全体の主旨を正しくとらえることができているかを確認するまとめの問題とした。正答率は約６割、誤答の⑤を選択した者が約２割いた。「人体の運動と連動」して作られる空間は「かつての木造家屋」でなく現代の「バリアフリー」の空間の特性と述べた本文序盤との対応を見落としたためと思われる。

問６　(ⅰ)は、本文におけるカギ括弧、疑問符を伴う表現の効果を問う問題。正答率は約９割と非常に高く、表現の特徴を問う設問としては基本的な問題であったと言える。(ⅱ)は、本文における「引用（青木淳の建築論）」の意図や効果についての理解を確認する問題。正答率は約５割であり比較的難度が高かった。(ⅰ)(ⅱ)の二題により、表現の特徴に関する受験者の習熟度を幅広く測ることができたと考える。

第２問　本年度は、加藤幸子（ゆきこ）の小説「海辺暮らし」（初出「日本きゃらばん」1981、出典『自然連禱（れんとう）』2008）からの出題であった。作品全体は、海辺に住み、小さな店を営む老婆を主人公としており、家の前に広がる干潟の自然を舞台に環境問題を中心テーマとして描かれている。

問題文は、本編の結末部分に当たる。老婆と彼女の転居を望む市役所職員との軽妙な会話のやり取りに続いて、本作の舞台である干潟の風景とそこに佇（たたず）む老婆を描くことで、作品に込められた奥深く重いテーマを表している。受験者には、テーマとしてある環境問題への理解を深めさせるとともに、文体、構成、視点、表記などへの作者の工夫に注目させることで、文学的表現としてのありようについて考察させた。なお、作品の舞台として具体的な土地や年代は設定されてはいないが、現実に起こった（あるいは起こっている）公害問題が想起されやすい。設問に当たっては、公害問題・公害病等にかかわる知識の有無によって不公平にならないよう

に配慮した。また、行頭への行数表示を復活させたことで、受験者の負担の軽減を図った。

問１　本文中の語句・表現について、文脈を踏まえた上での意味把握ができているかを問う設問である。受験者にとっては基本的な語い問題であったようで、おおむね適切な正答率となったと言える。

問２　お治婆（はるばあ）さんと市役所職員とのやり取りの中にお治婆さんの「心情」を読み取らせる設問である。この場面に続く展開も視野に入れながら読むことができれば、内容はそれほど難しくはないため、正答率は６割台後半となり、適当であった。

問３　市役所職員の「心情」を展開に従って読み取らせる設問である。前後の文脈の中で市役所職員の発言の変化をきちんと読み取ることで、正答に至ることは難しくないが、正答率は５割をやや上回った結果となり、高くはなかった。

問４　お治婆さんの発話部分に対するカタカナ表記への変化を踏まえ、本文の前半部分に対する読解などにも注意して読むことができれば、正答は容易に導き出せる。正答率は８割台後半と、非常に高かった。

問５　問題本文の展開を踏まえ、空白行を境として明らかな形で認められる表現対象や叙述の変化から、後半部分の「意味」を読み取らせる設問である。象徴性を含んだ文学的な表現のありように注目すれば、お治婆さんの行く末について暗示的に表現している本文の正確な読解を行うことができ、正答は導き出せるが、正答率は４割台後半となった。やや低めであるが、設問全体から見れば適切であったと言える。

問６　本文における「比喩（ひゆ）表現」、「呼称表現」、「人物関係」、「心理的距離表現」、「描写表現」など、小説における表現上の特徴についての理解を問う問題である。呼称表現についての正答率は約９割と非常に高く、描写表現についての正答率は２割台で低く、合わせるとやや低めである。叙述の特徴を問う設問として基本的な問題であったと言える。

第３問　作者不詳の鎌倉時代の軍記物語『保元物語』の中巻「為義最期の事」の一節。前半は、勝利した後白河天皇方の源義朝が、敗北した崇徳院方の父為義と対面する場面であり、後半は、義朝の家来二人のやり取りを中心とする場面である。今回出題した部分は、中世軍記物に典型的な文章で、高等学校の授業で『平家物語』等に親しんでいれば、読みこなせる難易度の文章である。設問では、立場上やむを得ず父親を欺いて処罰せざるを得なくなった義朝の心の動きと、義朝の家来たちによる武士としての論理、さらに、子に欺かれたと当初は憤りつつも最終的には子の幸せを願う為義の心の動きなどを正確に読解することを柱に、基本的な語い、文法事項等、できるだけ幅広い古典読解の力を確認することをねらった。なお、軍記物語の特質上、子が親を殺すという殺伐とした内容を含むので、親と子の情愛を中心に読み解くように方向付けた。問題文の分量は、登場人物それぞれの心情が理解できるようにと、例年よりも若干長めとなり、また、複雑な人物関係を分かりやすくするため、注の数も多くなった。全体の得点率は４割台半ばとなったが、これは例年並みの範囲内であり、ほぼ適切な難易度であったと思われる。

問１　㈠は「なだめすかす」に通ずる「すかす」の意味と「まゐらす」の謙譲語としての意味を尋ねる。㈡は副詞「すでに」と動詞「失ふ」の意味を尋ねる。㈢は「知ら・せ・給ひ・候は・ず・や」という複雑な構造の述語の意味を尋ねる。㈡、㈢の正答率が比較的高かったの

に比して、㈠はやや低いという結果になったが、難易幅を広く出題するという観点からすれば適当なことであったと思われる。

問２　助動詞並びに動詞の活用形と意味の関係の識別について尋ねる。正答率は全体では７割弱と、基礎的な学習をきちんと行っている受験者にとって適切な難易度であった。

問３　子の義朝の涙の意味するものを、本文にそって正しく理解しているか否かを問う問題である。父を処罰せざるを得ない立場となってめぐらしたはかりごとに気付かず、自分の言を素直に信じている父の姿を目の当たりにした義朝の感情を読み解かなければならない。正答率は５割弱と丁度よいところに落ち着き、理解度に応じた差異が明確に出た問題となっている。

問４　義朝の家来による武士としての論理や価値観に関する主張が正しく読み解けているかを問うものであり、敵将とは言え、士らしく名誉ある最期を遂げさせたいと望む波多野次郎の心情を尋ねている。正答率は５割を少し超えたものとなり、妥当な問題であったと判断される。

問５　子義朝に対する父為義の思いの移り変わりを尋ねる問題である。本文の対応箇所が正しく読み解けていなければ正答しにくい選択肢となっているためか、正答率は３割弱と、第３問の中では最も低い正答率となっていて、細部まで正確な把握ができているかどうかが判別できる問題となっている。

問６　出題範囲として明記されている「国語総合」も踏まえ、本文の表現の特徴と内容について総合的に尋ねる問題である。本文の全体的特徴がつかめているか、また、その特徴を合理的に説明できるかを問う。正答率は４割強であり、この文章が全体的にきちんと読めているかどうかを問うことのできる問題となっている。

第４問　本文は元朝の学者・文人である黄溍（こうしん）の作品集『金華黄先生文集』所収の「敏学斎記」からその一部を抜粋したもの。字数は208字（句読点を含むと241字）と、やや長めだが、内容的には比較的平易な議論文であり、主題も明晰（めいせき）である。また、話題も高等学校の教科書でなじみ深い孔子やその弟子たちの話が中心であり、注の数も少ないので受験者にとってもそれほど抵抗なく読み進めていけたものと思われる。出題部分は筆者が学業を修めるに当たっての方法論を述べている部分。キーワードは「敏」と「遜」。物事を学ぶに当たって、機敏さ・積極性が大切なのか、それとも謙虚さ・遠慮が大切なのか。筆者は儒教経典を引用しつつ、いずれも大切であると述べながらも、最終的には「敏」がより優先されるべきであると結論付けている。この対となる「敏」「遜」二つのキーワードの優劣関係についての筆者の考えを、段落ごとに正確に読み取っていけるか否かを中心に設問で尋ねた。結果として、第４問全体の得点率は５割弱であり、22年度の約４割、21年度の５割強、20年度の４割台後半と比較した場合、平年並みか、やや易しいと判断されるが、設問ごとに検討してみたところ、識別力があったと思われる。議論文の正確な読み取りができたか否かによって成績が大きく分かれたようである。

なお、抽象度の高い論説文を素材文に用いる場合、設問の展開において、かなりの程度、読解の手助けになるような工夫をしていく必要があろう。また、本文の長さについても、あまり長文化せぬよう今後とも注意を払っていきたい。

問１　漢字の意味を問う問題。漢文に頻出する漢字が文中でどのような意味で用いられているか、文脈から正しく判断して、その読みを選ぶ能力を求めた。「偏」は「偏差値」などの熟語もあるが、その本来の意味がつかめているかについて尋ねてみた。正答率も５割を超えており、漢文に慣れている受験者にとっては、比較的容易であったようだ。「所以」については、第一義である「理由」の意でなく、第二義「手段」の意味を知っているか、知らなくとも文脈からたどれるかといった主旨からあえて尋ねてみた。結果としては、誤答である②「目的」を選ぶ受験者が多く、難問であったようである。

問２　文章の意味を問う問題。本文全体にかかわるキーワード「敏」「遜」の意味が定義づけられている部分である。対句を利用しながら文意をとらえていくという漢文の基本的な発想を日ごろから身に付けているか、「不能」「不及」の読み取りができているかを尋ねた。正答率は６割程度で、かなりの受験者が順当に正答を導き出せたようである。その意味でも適切な問題であったと考えられる。漢文には対句や比喩が多いので、それらを含めた文章解釈の設問は今後も継続して出題していくべきであろう。

問３　書き下し文、及び解釈を問う問題。漢文の基本的な語法を確認する。漢文頻出の「則」「曷…乎」「於」等の用法を理解しているか否かを中心に尋ねてみた。結果として５割以上の受験者が正答を導き出せていた。正答率から見ても適切な問題であったと考えられる。「於」を「よりも」の意味に取って誤答しているケースも１割程度見られた。該当部分は本論全体の核心部分にも相当しており、ここを読み誤ると以下の読解が難しくなる。

問４　文意を問う問題。第二段落全体の文の流れや主語が何を指しているかが正確に読み取れているかを問うてみた。比較的容易な問題であるので、高得点を期待していたが、結果として正答率は５割を超えなかった。誤答である②を選んだ受験者が２割近くいたが、この選択肢では「遜」が重視されることになり明らかに間違いである。選択肢後半部分を熟読せずに即答してしまった受験者が多かったように思われる。

問５　本文の主旨、及びキーワード「敏」「遜」が、筆者の主張にそって正確に把握できているかを問うてみようと考え、その結果、センター試験では比較的珍しい空欄補充問題という形式を用いることにした。事前の検討段階では簡単すぎるのではないかという指摘も受けていたが、結果として正答率は４割をやや超える程度であった。論説文における空欄補充問題は、論点の正確な把握ができていないと正答を導くのは難しい。昨今の受験者が漢文の論説文にあまり慣れていないことを証明する結果となってしまったようである。

問６　各段落相互の関係が正確に読み取れているかを問うとともに、それを踏まえた上での筆者の意図を問うてみた。表現問題と内容真偽問題を融合した形での出題である。段落構成については６割近くの受験者が正答に導けたが、筆者の意図を問う問題では正答者が４割に満たなかった。本論の主旨は「敏」「遜」のうち「敏」を優先すべきであるということであるが、それさえ押さえていれば正答に導けたはずである。ところが、「敏」「遜」どちらも大切であるといった主旨の③を選ぶ受験者が、正答にかなり近い割合（３割強）で多かったのは、いささか意外であった。いずれにせよ、ここでも受験者の論理的な文章に対する戸惑いがうかがわれるようである。

３　お　わ　り　に

すべての大問の中に表現に関する設問を必ず含むという新しいスタイルは、既に教育現場において広く認知されていると思われるが、一層の洗練が求められていると同時に、受験者に過重な負担となっていないか検証の必要もあろう。古文は、本試験では初めて軍記物から出題し新傾向を模索した。全国の高等学校教育に対する影響力の大きいセンター試験である。安定した難易度の維持に心掛ける一方で、マンネリズムに陥ることなく、教育現場に新鮮なメッセージを送り続けることの重要性を認識しながら、今後も問題作成に臨むことにしたい。